

City Life
NEWS
CULTURE
-

廃棄物が生み出す 新たな価値「アップサイクル」

廃棄品を活用して新しい製品を作る「アップサイクル」がファッションやプロダクトの分野で注目を集め始めている。ゴミの減量が全国的に課題となる中で、アップサイクルは今後一つの解決法となりえるのだろうか。



1.自転車パーツを組み合わせてできたハンガーラック「ハンガー楽」 2.端材を和紙で包んだLED行灯「wa+」 3.エンジンバルブとバネのツールスタンド「輪立」 4.銅線の束を電球に巻き付けた球体のライト「prem」 5.バネを利用した椅子「e-spring」 6.エンジンバルブのシャンパングラス 7.ママチャリスタンドで折りたたみテーブル「Atelier Exterior」 8.コイルと木材のファイル「Listing file」

廃棄物をかっこよく便利に

廃 棄物を再資源化し、新たな製品の原料として利用することを指す「リサイクル」とは異なり、端材(不良品、不用品)の特徴を活かしてあらゆる部分を利用し、クリエイティブな工夫を凝らして元の製品よりも価値の高いものを生み出すことを「アップサイクル」という。

デザイン会社レイ・クリエーション代表の原田徹朗さんは、8年ほど前から工場の端材や不良品を活用して新たなプロダクトを生み出すアップサイクルに取り組み、その活動を民間企業や教育の現場に波及させている。

阪大で生まれた 端材ブランド「etsaw」

大 阪大学では、学生の創造力を養うことを目的に、2014年から一般教養の授業にアップサイ

クルを取り入れている。その講師を務め、学生にアップサイクルの手法を伝えているのが原田さんだ。授業は、学生たちが実際に工場に行き、匂いや音を体感しながら端材を得るために自ら交渉するところからスタート。持ち帰った端材をもとに、外部から招いたクリエイターとペアになって製品化のアイデアを出す。これまでに、ネジやボルトなどの端材から椅子や照明、食器など、創意工夫にあふれる製品が数多く生まれた。これらは、ゴミ箱を意味する英語「waste」を逆さまにした「etsaw(エツソー)」としてブランド化され、「不良品から富良品へ」と題された展示会などで公開・販売されてきた。



どのようにして端材や不良品が出るのかを知るために、実際に工場を見学。



阪大での講義の様子。学生1人につき、工業デザイナーなどのクリエイターが1人ずつ講師として指導する。



2013年に開催された「ネジ工場-不良品から富良品へ」イベント。

不良品のネジで 一夜限りのイベント

2 013年には、大阪のとあるネジ工場で年間100tも廃棄されていたネジを活用し、「ネジ工場-不良品から富良品へ」という展示会を奈良県のギャラリーで開催した。床には大量のネジをばらまき、室内には工場で撮影した製造現場の映像を4台のプロジェクターで映し出し、ネジを製造する際の機械音をミックスして作り上げたBGMを響かせるという独創的なイベント。最終日には約200人がネジ空間の中でパーティーを催し、ネジとアートが一体になることで製品の価値の高さを知らしめた。「端

材を使えば、プロダクトの生産だけでなくイベントもできる。どうコミュニティを形成し、事業にどう発展させるかを考えることが大切です」と原田さん。

工場の改善活動にも

原 田さんがアップサイクルに取り組み始めたのは、コンサルティングを行なっている工場の職場改善活動の一環だった。高い品質基準を誇る日本の生産現場では、基準に満たない製品が大量に廃棄されている。不良品を再利用するより、廃棄して新しく作り直したほうが生産性は高まるからだ。しかし、そこに創意工夫はない。「端材から生まれた製品を見れば、捨てられるものに価値があることが工場の社員にも分かるはず。自分たちが素晴らしいものづくりをしているという誇りを再認識でき、それが新しい発想を生むのでは」と原田さん。機械的ではないポジティブなものづくりが、本当の意味での生産性向上、改善活動につながるかと話す。

原田さんの目標は、アップサイクルで作ったものを製品化すること。しかし、製造業は日々の業務に忙しく、また端材では安定的に一定の数量を生産することが難しい点が課題だ。「端材は捨てるもの、という既成概念を破って、まずはそこに価値があることを一人ひとりが認識することが大事ではないでしょうか。」